愛知で製鉄資機材販売・鋼板加工販売

三和実業 創業60周年

製鉄資機材販売、鋼板加工販売などを手掛ける三和実業（本社＝愛知県東海市）は4月1日、創業60周年を迎えた。あす5日には記念式典を開催する。創業者の中田梅次郎氏が、日本製鉄との強い結び付きを軸に起業し、同社への資材納入から発生品の鋼板販売、さらには加工、鋼管製造など多様な機能を身に付け成長を遂げてきた。

同社の始まりは1965年4月。その立ち上げから日本製鉄との関わりが深く、資材納入から事業を開始した後は、日本製鉄の強い信用を背景に、同社の生産工程で生じる発生品の鋼板の販売に乗り出し、日本製鉄と需要家双方のニーズを結びつけることで機能の拡充、売り上げの拡大を進めてきた。

直近では、日本製鉄製のヘアライン調電気めっき鋼板「ＦｅＬｕｃｅ（フェルーチェ）」を、本社事務所エントランスの壁材に採用。内装材としての拡販を進めている。

日本製鉄との強い結びつきの中で発展を遂げてきた三和実業は、今後も「日本製鉄への協力」をベースに、鉄鋼製品の需要家などへの貢献を図ることで、次の70年、100年を目指していく。その節目に際し、その歴史を列記するとともに、二代目社長の中田英幸会長と三代目の中田貴之社長に、これまでの振り返りと今後の展望を聞いた。

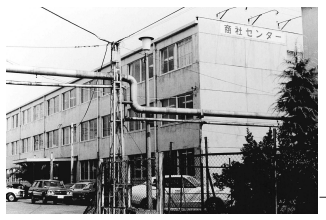
日鉄と需要家要望つなぐ

中田英幸会長

財務的に強い会社へ

――60周年おめでとうございます。現在のお気持ちから。

中田英幸会長「企業の寿命は30年と言われたが、その倍まで続けることができたことは大したものと感じる。父・梅次郎が1965年に起業し91年に私が継いだが、当時の景気の良さが信用できず投資話しを断ってきたことと、素晴らしい社員に恵まれたことが良かった。父には、企業の目的は存続することであり、利益を上げることはその手段と教わった。社員とその家族の幸せを守り続けることを第一に思い社長を務めた」



創業者の中田梅次郎氏㊤、創業当初の社屋（商社センタービル）

――お二人それぞれの入社当時、社長就任時の状況は。

会長「入社当時、上司に〝月間販売量が1000㌧を超えたら飲みに連れて行ってやる〟と言われた。それが当時の当社のレベルだった。社長就任後は、2000年に利益が200万まで落ち込み、60歳以上の社員の早期退職などで、翌年には1億円の利益を計上するなど厳しい時期も乗り越えてきた」

社長「私は07年に入社。中国が猛烈に粗鋼生産を増やしてきた時で、その後アルセロール・ミッタルが誕生し、日本でも高炉の提携、統合が起きた。鉄の価格も急騰しハイテン鋼も急増と大きな変化が生じている。16年に社長に就任した以降は、鉄鋼製品価格はほぼ上昇基調だったが、その前にリーマン・ショックなどで得た経験が今も生きている」

――転換点となった出来事を。

会長「14年の新本社事務所の建設。また、99年に当社のスリッター機能を移して、現日鉄物産と共同で現日鉄物産名古屋コイルセンターを設立したことも大きな出来事。コイルセンター業界全体が設備過剰となり、将来的に集約が必要との見通しの中で先行して取り組み、当社はレベラーとシャーリングでシート材の加工に特化した。山口工場開設による鋼管製造開始も重要な施策となった」

――お二人が目指した三和実業の姿とは。

会長「入社した当時の当社は資金力が弱点だった。そのため私が社長に就任してからは、土地の購入や設備投資を行い、財務的に強い会社を目指した。山口工場や東海第二工場を建て、その集大成が50周年での新本社事務所建設となった。強い、打たれ強い、強かな会社が、従業員の生活を安定させる」

社長「会長と同じく強い会社にしたいと思う。社員が働きたいと思う会社ということは当たり前とし、強い会社、つぶれない会社にするべく今後もさまざまな取り組みを進めたい」

――自社の強みをどのように見ているか。

社長「創業時から続く、日本製鉄とのパイプの太さ。資材調達も製品販売でも、困り事や要望にはとにかく応え、日本製鉄が困った時に相談してもらえる会社を目指している。昨年には、日本製鉄のＦｅＬｕｃｅ（フェルーチェ）を本社事務所の内装材に活用し、拡販に努めている」

――課題としては。

社長「採用が大きな課題。この地区は、自動車や鉄鋼の大手メーカーが多数あり、中小企業に対し学生の目が向きにくい環境にある。そのため採用はまだまだ課題となる」

――22年にはホールディングス（HD）制も導入した。

社長「HD会社の下に三和実業と芙蓉鋼板加工が並ぶ形となっている

HD化は総合力をより強くする第一歩と語る英幸会長㊨と貴之社長

が、両社はこれまで代表者が同じというだけで、資本関係もなくまったくの別会社だった。それがHD化により資本関係上、初めて兄弟会社になった。いつか両社を一つの会社に統合することで三和実業は、商社機能に鋼板加工・製缶機能があり、パイプも製造できる会社となる。HD化は総合力をより強くするための大きな第一歩になっている」

――人材の育成、定着に向けては。

社長「可能な限り賃上げをしたい。会社がもうけて、その分を給与の増額や福利厚生の改善に活用し、働きやすい環境を整えることで定着につなげていく」

――設備投資への考え方を。

社長「設備が全体的に古くなっているため、今後の更新期に本当に必要な設備をリプレースして残し、不要設備は外部委託に切り替える。工場自体も古く分散しているため、一カ所に集約できれば理想だ。会社を強くするための一つの手段として、M&Aも考えている。メーカーとして何かを製造している企業を対象とし、設備投資よりも重視していく」

――今後の70年、100年に向けて。

社長「今よりも強い会社となり、日本製鉄および取引先さまにとって必要とされる会社を目指していく。後進を育成していくための教育にも重点的に取り組み、特に私を支える存在となる、番頭格の幹部育成に努めていく」

（安江　芳紀）

中田貴之社長

意匠性めっき板拡販

貴之社長「ここまで来ることができたのは、会社を起こし強くしてくれた祖父と父、OBや現役社員のおかげ。日本製鉄グループをはじめ、素晴らしい取引先に恵まれたことも大きかった。皆さんに感謝申し上げたい」

――長く事業を継続できた理由をどのように考えるか。

会長「営業や経理、加工現場など、社員にはそれぞれに役割があり、それが一つにまとまり会社を運営していくという意識、チームワークが良かった」

社長「日本製鉄を最大の取引先とし、その要望に真面目に応えてきたことが、60年続いてきた最大の要因。また、チームワークよりもさらに深いファミリー的な社員の絆があると感じている」

――お二人が目指した三和実業の姿とは。

会長「入社した当時の当社は資金力が弱点だった。そのため私が社長に就任してからは、土地の購入や設備投資を行い、財務的に強い会社を目指した。山口工場や東海第二工場を建て、その集大成が50周年での新本社事務所建設となった。強い、打たれ強い、強かな会社が、従業員の生活を安定させる」

社長「会長と同じく強い会社にしたいと思う。社員が働きたいと思う会社ということは当たり前とし、強い会社、つぶれない会社にするべく今後もさまざまな取り組みを進めたい」

――自社の強みをどのように見ているか。

社長「創業時から続く、日本製鉄とのパイプの太さ。資材調達も製品販売でも、困り事や要望にはとにかく応え、日本製鉄が困った時に相談してもらえる会社を目指している。昨年には、日本製鉄のＦｅＬｕｃｅ（フェルーチェ）を本社事務所の内装材に活用し、拡販に努めている」

――課題としては。

社長「採用が大きな課題。この地区は、自動車や鉄鋼の大手メーカーが多数あり、中小企業に対し学生の目が向きにくい環境にある。そのため採用はまだまだ課題となる」

――22年にはホールディングス（HD）制も導入した。

社長「HD会社の下に三和実業と芙蓉鋼板加工が並ぶ形となっている

三和実業 沿革

1965年（昭和40年）	4月	愛知県東海市で営業開始（資本金500万円）
69年（昭和44年）	7月	芙蓉鋼板加工設立（東海市）
70年（昭和45年）	4月	鉄鋼加工部門を分離独立し、三和機工株式会社を設立
		三和機工東海工場を開設
	7月	資本金1000万円に増資
74年（昭和49年）	7月	資本金1500万円に増資
77年（昭和52年）	1月	大東鋼板工業設立（大阪）
	2月	東京営業所開設
	5月	東海金属加工設立（東海市）
79年（昭和54年）	11月	大阪営業所開設
81年（昭和56年）	6月	大東鋼板工業移転（大阪市大正区）
		三和機工大阪工場開設（大阪市大正区）
83年（昭和58年）	2月	九州営業所開設
89年（平成元年）	5月	資本金4500万円に増資
	9月	東海金属加工　三和機工内に移転
91年（平成3年）	4月	三和機工株式会社を吸収合併(資本金5512.5万円)
	5月	中田梅次郎　代表取締役会長に就任
		中田英幸　代表取締役社長に就任
95年（平成7月）	4月	大阪工場を山口工場（山口県光市）へ移転
96年（平成8年）	7月	大東鋼板工業　三和実業大阪営業所内に移転
97年（平成9年）		東海金属加工千葉営業所開設
2001年（平成13年）	8月	東海第2工場開設（東海市）
05年（平成17年）	4月	東海金属加工業務引継（東京）
08年（平成20年）	4月	大東鋼板工業業務引継
14年（平成26年）	4月	SANWA MATERIAL(THAILAND)CO.,LTD.をタイ国(Chonburi)に設立
	10月	愛知県東海市に本社新社屋開設
		ロゴマーク変更
16年（平成28年）	5月	中田英幸　代表取締役会長に就任
		中田貴之　代表取締役社長に就任
22年（令和4年）	12月	SNWホールディングス設立により ホールディングス体制に
23年（令和5年）	1月	オザワ工業をグループ化

三和実業の脱炭素取り組み

DRAGOREX BALING HOOP for carbon neutral

日本製鉄グリーン鋼材使用

梱包用帯鉄の販売開始

三和実業はコイルセンターとしてのカーボンニュートラルへの取り組みの一つとして、日本製鉄のNSカーボレックスニュートラルを使用したベーリングフープの製造販売を4月から開始する。自社使用分についても、4月から順次、切り替えていく。

同社では、コイルセンターとして行えるカーボンニュートラルへの取り組みは限られているが、取引先各社にこの取り組みに賛同してもらえるよう説明し、流通全体でカーボンニュートラルへの取り組みを広げていきたいと考えており、既に数社から申し込みを受けている。

なお、名称については同社が名古屋を拠点としている事から『DRAGOREX（ドラゴレックス＝龍王）』とした＝上記ロゴ。